

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381070

研究課題名(和文) 1960から70年代における日本の教育実践に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental Research of School Lessons in Japan among 1960's to 1970's.

研究代表者

小国 喜弘 (KOKUNI, Yoshihiro)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授

研究者番号：60317617

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：1945年を画期とする、戦後の学校教育において、1960年代から70年代は大きな転換期であると捉えられてきた。ただし、これまでの日本教育史の研究では、当該時期の研究の蓄積が弱く、史資料の収集すら行われていない現状があり、また関係者への聞き取りも行われてこなかった。そこで、本研究では、いくつかの分野に即して当時の関係者への聞き取りを行うと共に、基礎的な資史料の収集に努めた。また、就学時前教育として保育研究、教科教育の一領域として国語教育、さらに当該時期に制度化が進められ実践の形が大きく変化した障害児教育の三分野を事例として、試論的に転換期を描き出そうとした。

研究成果の概要(英文)：Japanese school education changed significantly among 1960's to 1870's. But Historians of Japanese shool education doesn't focus this peropds. So, we collected fundamental documents and interviewed with teachers, and scholars who were concerned school education these days.

研究分野：日本教育史

キーワード：日本教育史 教育方法 戦後教育学

## 1. 研究開始当初の背景

日本の学校教育の歴史を改めて振り返るならば、1945年、正確には1947年の日本国憲法、教育基本法の成立、6・3・3制といわれる小学校・中学校・高等学校の単線的な教育体系の成立は大きな画期であった。ただし、そこからすでに70年が経過しており、改めて、戦後教育時代を時代区分する必要が生じている。その際、世界的にも転換期であるとされる1970年代に注目する必要があると考えた。1970年代には、高校進学率も飽和状態を迎え、6・3・3制の完成期としても位置づけられてきた。

日本教育史研究は、戦後教育については、1940年代から50年代の成立期を主に取り上げてきたが、今後は、1970年代の転換期にも目を向けていく必要が生じている。

## 2. 研究の目的

以上のような背景の下に、転換期である1970年代とそれを準備した1960年代に焦点をあてて、教育実践に定位する形で、どのように転換期を描き出せばよいのかを検討することを目的とした。

教育制度ではなく、教育実践に取って焦点を当てようとしたのは、当該時期は、子どもの生活が大きく変化するとともに、非行や校内暴力など、子どもたちの学校逸脱行動が注目される時期であり、子どもと教育制度との接点である教育実践に注目することが、転換期を描き出すためには必須であると考えたためである。

## 3. 研究の方法

研究の方法としては、まず焦点をあてる領域を三つ選び出した。

- (1) 障害児教育
- (2) 保育
- (3) 国語科教育

三つを選び出した根拠は、当該時期における教育制度上の最も大きな変化は1979年の養護学校義務化にあり、1960年代から70年代は養護学校が増設された。それは従来の就学猶予・免除児童が就学可能になったことを意味するが、同時に、従来普通学校・普通学級にいた子どもたちが養護学校へと措置される事態をも伴っていた。障害児教育に焦点をあてることで、国民教育における包摂と排除の論理がどのように変化したのかを教育実践に定位して検討することを可能にするためである。

第二に、保育に焦点をあてたのは、当該時期は、核家族の増加・母親の就労により、就学前教育が大きく問題になった時期であり、また、保育と教育とをどのように接合するかが問題になった時期であった。そこで、保育実践に焦点をあてることを通して、子どもと

学校教育との接点がどのように構築されようとしていたのか、その論理の転換を明らかにしようとした。

第三に、当該時期は、民間教育団体の活動が次第に教科毎の研究活動に重点を置くようになると共に、教育課程の自主編成が課題となるようになった時期だった。当時、教科の科学化・系統化が焦点になっており、様々な教科の中で、国語教育は、文学読解や作文といった人文的要素の強い領域をいかに科学化するかにおいて、強い軋轢を抱えていた。そのため、国語科教育に焦点をあてるのが、1970年代を教科に即して試論的に描き出すには最も適しているという仮説を立てた。

また、研究方法としては、まず関係する領域の資料を悉皆的に集めることから開始した。1970年代には、出版物が多数刊行されているが、必ずしも図書館に収蔵されていない資料が教育実践の場合は多数あったからである。

次に障害児教育分野では、関係者への聞き取りを行い、当時の状況をできるだけ聞き取り集めて保管することも視野に入れた。

また、1970年代の転換期を描き出す枠組みとして、政治性・物語性・共同性の変貌として把握し得るのではないかとという仮説を立てた。障害児教育の検討では政治性、保育実践の検討では物語性、国語科教育の検討では共同性に着目することにした。

## 4. 研究成果

以下、焦点をあてた三つの領域それぞれについて研究の成果を示す。

### (1) 障害児教育

従来、障害教育において、1979年養護学校義務化は、就学猶予・就学免除者を学校教育制度に包摂し得た記念碑的出来事として把握されてきた。教育学においても国民の教育を受ける権利の保障の進展の成果として捉えられてきた。

但し改めて、当時の障害児教育の教育実践を丁寧に見直したとき、養護学校増設過程において、すでに普通学校に通学している生徒が養護学校に措置変更されたり、また従来であれば、普通学校に通学し得た子どもが養護学校に教育委員会によって強制的に措置され、「障害児」やその親たちの抗議・抵抗運動が数多く展開されていたことが分かった。

これらは、当時を知る者の間では了解されていたが、政治運動として処理され、その教育的意味が問われることがなかった。近年では、障害学の中で障害者の自立生活運動の代表的事例として取り上げられることはあったものの、教育の問題として検討されてきたことがなかった。

故に、本研究では、「障害児」の普通学校就学運動がどのように展開されてきたのか

をまず関係者の聞き取りを蓄積することに焦点を置いた。研究の成果はゼミ報告として刊行している。

研究を通して、明らかになったのは、包摂と排除の論理が1970年前後において大きく転換していることにある。従来は、「障害児」を教育制度の外部に排除していたのに対して、1970年代以降、教育制度の内部に包摂した上で、特殊学級・養護学校へと周辺化することになった。政治性の変更という観点からいえば、抵抗運動の向かう対象が1960年代までは、教育制度や教育行政というマクロな政治だったのに対して、1970年代以降、身近な学校や教師が織りなすミクロな政治へと対象が向かいがちであり、マクロな政治をもたらす問題自体が次第に見えづらくなっていく。同時に、教育政治の技法として、医学が本格的に援用されるようになるのも1970年代であった。例えば登校拒否児が情緒障害として医学的治療の対象とされ、情緒障害児学級に措置されていく事態も展開されていく。学校逸脱行動を起こす児童に対して「障害」の診断がくだされ、医学的な治療の対象とされると同時に、特殊学級へと周辺化されることは、医学が特殊教育の理論的な根拠を提供することによって、教育的統治技法として援用され始める時代の幕開けを示唆している。

## (2) 保育

1960年代から70年代の保育・幼児教育において重要なのは、多様なかたちで幼児の学びが追究された事実である。本研究では、幼年教育の概念、戦後新教育を端緒とするプロジェクトの展開、生活綴方の系譜をひく口頭詩採取運動、教育の現代化運動等に注目して、その実践の展開について、物語的な実践記録の検討を通して解明を目指した。

戦後の教育改革では、「幼年教育」の概念において、3歳ないしは4歳から小学校低学年までを一貫する身体的で知性的で感性的な教育が模索された。しかし幼児教育を就学準備教育として捉える見方と、その見方に反対し幼児教育の固有性を主張する見方との狭間で、幼年教育の概念は力を持たなくなっていく。その記憶は、日本教職員組合の「幼年教育」という部会名を経て、全国幼年教育研究協議会へと引き継がれている。

プロジェクトは幼年教育と同様に新教育の系譜を引き、幼稚園から小学校低学年の教育を一貫する教育として構想されている。和光幼稚園では、1950年代にコア・カリキュラム連盟の理論に基づいたカリキュラムが構成され、中心となる活動としてのりものごっこや動物園ごっこが位置づけられた。当初は態度の養成を中心とする社会適応主義の性格が色濃かったが、1960年代半ばから70年代にかけて社会的認識の獲得を目指す学習としての性格を強めている。

口頭詩採取運動は生活綴方教育の系譜を引く実践であり、保育者が子どもの言葉を書き取り詩集として編んだものである。最初は長野県で取り組みが始まり、『口頭詩集ひなどり』（1971）の出版を機に一定の広がりを見せている。口頭詩の実践は、子どもの言葉の採取を通してその認識の発展を企図するものであった。

1960年代にはまた、教育の現代化運動の影響を受けて、幼児に数や文字を教えようとする試みも推進された。当時の物語的な実践記録には、小学校のような教育と、教育しないことの双方を否定しつつ、「文字」や「数量」の指導が模索されたことを伝えている。集合や重さを教えた教師たちは、遊びが「学習的」になってしまうことへの戸惑いを語っている。しかし同時に、実践記録の物語的な記述において、教師が子どもの認識に着目することによって、たとえばシーソー遊びが、遊びでありながら重さの学びとなることへの気づきもまた現れている。

1960年代から70年代における幼児教育における「学び」の模索は、物語的な実践記録において幼児の知性の可能性を垣間見せている。その様相は、幼児の知性的な発達をどのように保障するかという現代的な課題に示唆を与えてくれる。

## (3) 国語科教育

1958年に学習指導要領が告示化され、各教科内容が規定される。1960年代から70年代にかけて、民間教育研究団体は一枚岩的に学習指導要領体制に抵抗しつつも、戦後初期からの実践研究の成果の継承を巡り、あるいは戦後初期の生活教育から脱却した教育内容の系統化や科学化、いわゆる教育内容の現代化と呼ばれる動向に関わり、教科毎、団体毎に独自の学力論、教育内容編成論、指導方法論を展開し、活発に論争を展開するようになる。本研究では現在も日本の子どもの課題とされている表現力、その基盤となる言語の教育が意図的に行われる国語科教育に焦点をあて、戦後から60年代、70年代にかけての表現指導の目的や内容・方法を分析することを試みた。戦後初期の民間教育研究団体が広く生活綴方をベースとして共有し、そこから団体毎の主張が分岐する経過を辿ったことから、綴方・作文教育にさらに検討対象を絞った。

生活綴方は子どもの生活の中での気付き（認識）を文字化（作文）することで表現し、それを学級集団の中で話し合いによって共有することで、二重の表現性を有することを特徴としている。表現活動を通し、共有を共感や互いの認識や行動の変化にまで高める指導を行うには、そもそも子どもの集団の生活基盤が共有されていることが前提となる。この生活基盤は60年代から70年代にかけての日本の高度経済成長に向かう社会産業構造の変化の中で急速に失われてゆく。

今回の研究では生活綴方において継承されてきた「共同批評」の指導に注目した。その意義が50年代には綴方の共有を通して共に互いの生活の改善に至るまでを含む点にあったことに対し、60年代以降には作文を添削し合う学習活動へと変化した過程に注目した。そこには改善すべき生活を共有できない子どもの共同体の変質とともに、教育の科学化や系統化を目指す運動の中で、作文の内容と形式を系統的に指導することを意図し、国語学や日本語学の研究成果を積極的に取り入れ文法的に正しい作文を書かせる立場が優勢になった動きを確認できた。しかし、日本語の正しい表記とその基盤となる文法教育を作文の指導の中で行うことを試みる立場はやがて「詰め込み」教育として批判の対象になる。またその一方で「共同批評」という活動自体、その「共同」が個人の自由な表現を奪うとして批判されるようになる。

作文・綴方による表現指導を巡って活発に論争が行われた70年代以降今日に至るまで、国語科における表現指導の問題は、一方では子どもの共同性の問題として、他方で文法も含めた内容や形式の系統的な指導の問題として、解決を見ているとは言い難い。今日指摘される表現指導の課題は複雑に入り組んだ60-70年代に展開された綴方・作文指導を背景にもつことが浮き彫りになったといえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8件)

小国喜弘「歴史教育の改めての危機」『歴史評論』791号、2016年3月、32-43頁

富士原紀絵「明星学園の国語教育と『につぼんご』」『人間発達研究』31、2016年、17-30頁

富士原紀絵・宮城信・松崎史周「児童生徒作文の基礎的研究」『お茶の水女子大学子ども研究紀要』4、2016年、9-20頁

小国喜弘・木村泰子・江口怜・高橋沙希・二見総一郎「インクルーシブ教育における実践的思想とその技法」『東京大学大学院教育学研究科紀要』、2015年、1-27頁。

小国喜弘「シンポジウム討論のまとめ 教育史は現実の諸実践にどう影響をもちうるか」『日本の教育史学』58(0)、2015年、127-129頁。

富士原紀絵「国語教育の作文指導過程における『文を見直す』行為に関する一考察」『お茶の水女子大学人文科学研究』11、2015年、99-111頁

小国喜弘『『教育実践』の歴史性』『研究室紀要』40号、東京大学大学院教育学研究科基礎教育学、2014年、143-53頁。

浅井幸子「1950年代から60年代における幼年教育の探究」『教育学研究』81(4)、2014年、423-435頁

浅井幸子「一九六〇年代の保育実践記録を読む-保育における「学び」の模索」『現代と保育』90号、2014年11月、72-85頁。

[学会発表] (計 3件)

小国喜弘・坂元秋子・邊見信・高橋沙希・中田圭吾・渡邊真之「1970年代における『障害児』の普通学校・普通学級就学運動の射程」、日本教育学会ラウンドテーブル、2016年8月

木村元・小国喜弘・小玉重夫・片岡洋子・古仲素人「戦後教育学の遺産の記録」、日本教育学会、2014年8月

小国喜弘「戦後教育学と生活綴方」、日本教育学会、2013年8月

[図書] (計 32件)

東京大学大学院教育学研究科小国喜弘ゼミ『『障害児』の普通学校・普通学級就学運動の証言』、自費出版(聞き取りの成果報告)太田素子監修、福本真由美・浅井幸子・大西公恵編集『戦後幼児教育・保育実践記録集』、日本図書センター、2014-16年、全29冊

佐藤学・秋田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人『岩波講座 教育 変革への展望 6 学校のポリティックス』、岩波書店、2016年 (小国喜弘「地域と学校の再編成」、161-88頁)

秋田喜代美・佐藤学『新しい時代の教職入門』、有斐閣、2015年 (小国喜弘「時代の中の教師」179-200頁、浅井幸子「歴史の中の女性教師」201-226頁)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小国 喜弘 (KOKUNI, Yoshihiro)  
東京大学大学院教育学研究科・教授

研究者番号：60317617

(2) 研究分担者

富士原 紀絵 (FUJIWARA, Kie)  
お茶の水女子大学 基幹研究院・准教授

研究者番号：10323130

浅井 幸子 (ASAI, Sachiko)  
東京大学大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：30361596